

激動の幕末・明治維新史料

第18回 講義 渋沢栄一と五代友厚 (原田先生)

この写真は10月26日、奈良・春日大社を撮影

3班広報担当2022年11月22日

特別講座激動の幕末・明治維新史料の第18回講義が11月22日(火)開催されました。入口でいつも通り、マスク着用・確認・検温・手消毒を受けました。

- ・講義は二人の実業家をテーマに渋沢栄一と五代友厚でした。講義のレジメ(渋沢栄一と五代友厚)を頂きました。先生が言われて、私を感じた要点のみ書きます。
- ・渋沢栄一は1840年3月16日(天保11年2月13日) - 1931年(昭和6年)11月11日)は、日本の明治・大正期の実業家。財界の指導者。雅号は青淵(せいえん)。
- ・江戸時代末期に農民(名主身分)から武士(一橋家家臣)に取り立てられ、のちに主君・徳川慶喜の将軍就任にともない幕臣となり、明治政府では官僚も務めた。民部省を経て直属の大蔵少輔に造幣、戸籍、出納など様々な政策立案を行い、初代紙幣頭、次いで大蔵省三等官の大蔵少輔事務取扱となる。
- ・退官後は実業界に転じ、第一国立銀行(現・みずほ銀行)や大阪紡績会社(1882年、1万500鍾、日本最初に成功した大紡績、のち東洋紡績に)。500社以上の発起人、その後社長の他、取締役・相談役も「日本資本主義の父」と称される。
- ・栄一も父と共に信州や上州まで製品の藍玉を売り歩くほか、原料の藍葉の仕入れ調達にも携わった。14歳の頃からは単身で藍葉の仕入れに出かけるようになり、こうした経験がヨーロッパ視察時に、近代的な経済システム、諸制度を理解吸収する素地となり、また後の現実的な合理主義思想の形成にも繋がったともいわれる。
- ・『論語と算盤』で一貫して語っているのは、「資本主義の利益主義一辺倒になってはいけない。道徳と経済のバランスをとることが大切だ」ということだ。タイトルにある「論語」とは人間性や人格の磨き方、リーダーとしてのあり方、人との付き合い方など、いわゆる「道徳」の象徴である。一方、「算盤」とは、科学技術を進化させ、経済をまわし、国を豊かにすることを表している。
- ・渋沢が実業家として携わった企業は約500といわれているが、教育や国際交流を含めた社会事業の数は約600に及ぶ。時間としても、実業家44年、社会事業家58年であり、生涯の寄付総額は183万円(今でいうと183億円)。対外関係4回アメリカに行っている。
- ・1906年6月6日、数え70歳になり、実業界はほぼ引退。第一銀行・東京貯蓄銀行以外の61社の役員を辞任。
- ・五代友厚は天保6年12月26日(1836年2月12日) - 明治18年(1885年)9月25日)享年49歳幕末から明治期の日本の武士、実業家。父五代直左衛門秀堯、母やす。4人兄弟(兄、姉、妹)の次男。才助。父は儒者、町奉行、1846年、1857~58年 海軍伝習所(長崎)、1859~68年 長崎で活躍。1862年グラバーと共に上海へ、蒸気船購入(4万両)様式艦船購入：幕府34隻、薩摩17隻、土佐10隻…

- 1862年8月12日生麦事件、1863年8月薩英戦争、1865年1月27日14名の英留学(松木弘安・のちの寺島宗則と五代才助は船奉行副役)、5月28日倫敦(ロンドン)着ベルギー、貴族コント・デ・モンブランが案内役、鉄工所・製鉄所・武器製造工場・製糖工場・ビール醸造場など視察、英伯独仏等、「金曜日、今日は外出をなさず、終日客舎にありて貿易整財富国強兵の諸策を談ず、夜に入りて近街を散歩するのみ」(『廻国日記』1865年8月4日パリ)1866年2月9日帰国。
- 新政府での活躍…微士、参与、外国事務掛。大坂在勤。2月 神戸事件、堺事件、パークス襲撃事件の処理。閏4月 外国事務局の事務を大阪川口運上所で扱い、五代と陸奥宗光が担当。→外国官権判事、兼大阪府権判事、大阪府判事、(友厚と改名)1869年5月15日 会計官権判事、横浜在勤、→1869年7月4日辞表提出。
- 大阪での起業と活躍の特色…1869年 金銀分析所、1871年 天和銅山(奈良県吉野)、1873年 弘成館創設、1874年 水沢水銀鉱山(三重県)、1876年11月2日堂島米商会所再興、朝陽館創立(大阪堂島、製藍)、1878年 大阪株式取引所、大坂商法会議所(会頭に選出)、1880年大坂商業講習所設立、1881年 大阪製銅会社、6月3日関西貿易社(総監)、8月1日 関西貿易社に岩内炭坑・厚岸官林その他の払下げを認可、8月 北海道開拓使官有物払下に世論反発、10月11日 払下げ取り消し、1883年1月1日 共同運輸会社開業、5月1日 関西貿易社解散、1884年 阪堺鉄道会社、1885年9月25日 東京築地の五代邸で没
- 2人を比較すると渋沢が産業の組織者であるとするれば、五代は自らの事業を起こして経営する実業家であるという点で、岩崎と共通している。大阪の大事業で五代が関わった点では、渋沢と共通するものがある。異なる出自で、渋沢は豪農商の子(流通に関与)→武士→官僚→事業家と五代は武士の(上級藩士)の子→官僚→実業家。
- 最後の締めくくりとして渋沢栄一は日本資本主義の父・財界の組織者 v s 五代友厚は近代産業の父であった。「いくつもの人生を生き、まっとうした渋沢栄一」に対して「早く行き過ぎた、早く生き過ぎた、早く逝き過ぎた五代友厚」とある。

以上